

『韓国語教育研究』(第12号)別刷

ISSN 2186-2044

【研究論文】

日本人韓国語学習者の自己紹介文に見る
語彙使用の特徴

金 珉秀

日本韓国語教育学会

2022年9月

日本人韓国語学習者の自己紹介文に見る 語彙使用の特徴

金 珉秀

本稿は日本人初級学習者の自己紹介文における語彙特徴を量的な観点から考察することを目的とする。そこで、まず、内容語の延べ語数(Token)と異なり語数(Type)を比較した。その結果、一般名詞と動詞は下位群・中位群・上位群においてTokenが増えるとTypeも増える傾向にあった。一方、形容詞と一般副詞は、そもそもの出現頻度が低く、TokenとTypeが変わらないケースが多数見られたが、学習者間の差が大きいことが分かった。そして、一般名詞は上位群の平均Tokenが最も多かったのに対し、動詞、形容詞、一般副詞においては、下位群の平均Tokenが最も多かった。また、一般名詞、動詞、形容詞の平均Typeは下位群が、一般副詞の平均Typeは上位群が最も多かったが、Typeと作文評価の間に有意な差は見られなかった。一方、中位群は一般名詞のTypeと作文評価が正の相関関係にあることから、多様な語彙を使用することが作文評価につながるということが分かった。次に、各群における内容語の使用頻度を比較し、語彙使用の様相について考察した結果、一般名詞、動詞、形容詞は、全作文における高頻度語彙と各群における高頻度語彙がほとんど一致したが、一般副詞は各群において各々様相が異なることが分かった。

1. はじめに

言語習得の出発点である語彙(조현용, 2000)は、コミュニケーションにおいて基本的な単位として学習者の言語能力を構成する主要な要素であるため、韓国語学習では必須な部分である(허원진・이민우, 2019)。한재영他(2010)は、外国語学習において初級・中級・上級のレベルの違いは、文法知識より学習者の内的語彙量と関連しており、文法知識が多少不足していても語彙力が豊富であれば、文章の理解度や表現力は高くなるとしている。そのため、第二言語のコミュニケーション過程では、時には文法的な知識なしに語彙を羅列するだけで意味が伝わることもある(김미옥, 2003)。文法を使わずに何かを伝えることはほとんどできないが、

語彙がなければ何も伝えることができないのである(Wilkins, 1972)。

また、Engber(1995)は第二言語において多様で正確な語彙の使用が作文の質を評価する上で重要な要素であるとしている。語彙の質と作文の質は相互に関連しているため、作文の向上は語彙の向上を通じて測定できる(Laufer, 1994)。もちろん学習者の言語運用能力は語彙力だけで測れるものではなく、文法力と「話す、聞く、読む、書く」といった4つの技能習得が伴われる必要がある。つまり、語彙力とは言語運用能力の十分条件とは言えないまでも、必要条件であると言える(杉本, 2013)。また、Laufer & Nation(1995)は母語話者と学習者、また下位群と上位群の学習者との著しい違いの一つは、いかに多くの語彙を知っているかということであり、特に発話や作文に表れる産出語彙数が語彙発達の最も確かな指標であるとしている。したがって、コミュニケーションの基本となる語彙を考察するのは、韓国語学習者の言語能力の発達を把握するために重要なことである。

このような語彙の重要性が注目されるようになり、韓国語教育の分野では、2000年以降に안경화(2003)、진대연(2006)、이영지(2011)、배도용(2012)、박정은・김영주(2014)、원미진他(2017)、강정희(2020)などによって韓国語学習者の語彙に関する量的研究が行われてきた。しかし、これらは主に韓国国内の韓国語学習者を対象としており、日本で韓国語を学ぶ日本人学習者を対象とした研究はほとんど見当たらない。中には韓国国内の日本人学習者を対象とした研究もあるが、他の言語圏の学習者と区別せず一緒に分析したり、中・上級学習者を対象としているため、その結果を日本人初級学習者の語彙の特徴として一般化することは難しい(김민수, 2022)。

そこで、本稿では日本人初級学習者の自己紹介文における語彙を量的な観点から考察し、語彙指導に関する示唆点を得ることを目的とする。そのために、まず、作文評点によって下位群・中位群・上位群に分類し、各群における内容語の延べ語数(Token)と異なり語数(Type)を比較する。次に、各群における内容語の使用頻度を比較し、語彙使用の様相について考察する。このような語彙使用の特徴が明らかになれば、日本人韓国語初級学習者に不足している語彙知識が把握でき、学習者の作文の質を高めるための語彙学習や語彙指導に関する示唆を得ることができると考えられる。

2. 研究方法

2.1 研究対象と資料収集

本稿では、日本の A 大学で筆者が担当している作文授業において韓国語初級学習者が書いた自己紹介作文を分析対象とした。授業時に書かせる分量は約 300 字～500 字程度であるが、本稿では作文の分量を揃えるために、합니다体¹で書かれた約 300 字程度のもの 29 編(60 語節～78 語節、総 1,979 語節)を選定した²。

この科目は韓国語入門や初級科目を履修した学生を対象とした選択科目であり、受講している学習者の専攻も様々である。授業では、授業開始の最初の約 20 分間でマインドマップを通じてテーマに関する全体構成を行い、その後、約 40 分間で作文を完成させる³。作文は筆者が用意した原稿用紙に書かせた。辞書の使用は自由であるが、翻訳ソフトによる文全体の翻訳は禁止した。したがって、辞書の使用が禁止されている試験とは異なり、学習者は回避ストラテジーを使わずに、作文で使いたい語彙を多様に算出できることが予想された。

2.2 分析方法

日本人韓国語学習者の作文については、韓国語能力試験(TOPIK)の HP 上に公開されている旧体制の作文問題における採点基準⁴に従い、評価者 2 名による採点

¹ 作文は 2015 年度から 2019 年度の間に収集したもので、授業時の制限時間内(内容構想 20 分、作文 40 分)に書かせた。学習者は합니다体、해요体、한다体のいずれかの文体を自由に選んで書いたが、本稿では합니다体で書かれた作文のみを分析対象とした。なお、합니다体で書かれた作文であっても初級レベル以上の学習者の作文は分析対象から外した。

² 旧体制の韓国語能力試験(TOPIK)の初級試験では、書き取り 47 番の問題として 150 字～300 字程度で作文をする問題が出題されており、TOPIK の HP 上(<https://www.topik.go.kr>)に公開されている「自己紹介」に関する模範解答例(第 13 回、第 30 回)の語節数はそれぞれ 69 語節、73 語節である。このことから、本稿では収集した自己紹介文(합니다体、全 61 編)のうち、約 300 字程度のものを研究対象とした。分析対象の作文を書いた学習者の内訳は 29 名(1 年生 1 名、2 年生 6 名、3 年生 11 名、4 年生 11 名)である。

³ 作文授業は 1 つのテーマにつき 2 回の授業時間(週 1 回、1 回の授業あたり 100 分)を設けており、学習者は 1 学期に 7 つのテーマに関する作文を書く。1 回目の授業ではテーマに関連する日本人学習者の作文 4 編を取り上げ、文法・語彙・分ち書きの誤り、テーマに関連する語彙・表現などを学び、2 回目の授業で実際に作文を書く。

⁴ 旧体制の TOPIK は初・中・上級に分かれており、初級試験では書き取り問題が出題されていたが、2014 年の第 36 回からは TOPIKI(初級)と TOPIKII(中・上級)に改編され、初級の作文問題はなくなった。なお、旧体制の TOPIK 初級の書き取りの採点基準における評価の配分は、作文の内容(9 点)、内容の展開および構成(6 点)、語彙(6 点)、文法(6 点)、正書法(3 点)である。

(30 点満点)を行った⁵。学習者 29 名の自己紹介文の平均は 23.07 点(30 点満点)で、標準偏差が 2.72 であった。この結果から、上位群は平均に標準偏差を足した 25.79 点以上、下位群は平均から標準偏差を引いた 20.35 点以下とし、その間の点数のものを中位群として定義しようとした。ところが、上位群と下位群が中位群に比べて少なかったため、この基準を参考に 25.5 点以上を上位群、20.5 点以下を下位群、その間の点数のものを中位群として捉えた。この分類の結果、下位群は 5 名(17.3%)、中位群は 17 名(58.6%)、上位群は 7 名(24.1%)となった。

学習者が原稿用紙に書いた作文は MS-Word に入力してデジタル化し、スペルミスや分ち書きなどを修正したファイルを作成した⁶。形態素解析や頻度分析などの処理および Word Cloud の作成は Python(3.8Version)を、統計分析は SPSS(27.0.1Version)を用いた。また、品詞判定は『標準国語大辞典』(<https://stdict.korean.go.kr>)に従って行った。語彙数は『標準国語大辞典』の見出し語と「ハングル正書法」の分ち書き規定を基準に分析した⁷。

Miller(1991)、Laufer & Nation(1995)は、延べ語数(Token)と異なり語数(Type)といった学習者が算出した語彙数が語彙能力を正確に反映できるとしている。そこで、3 節では、実質的な意味を伝える内容語(一般名詞、動詞、形容詞、一般副詞)⁸を中心に、下位群と上位群の延べ語数(Token)と異なり語数(Type)を比較し、量的な使用様相の相違を考察する。その後、内容語の使用頻度を中心に語彙使用の様相について比較分析する。内容語の使用頻度については、語彙の出現頻度に合わせて

⁵ 評価者間信頼性はカッパ係数でおおむね一致することが確認されたが($K=0.266$, $p<.001$)、初級レベルの語彙を適切に使用したかという評価項目においてははかかなり一致した($K=0.613$, $p<.001$)。

⁶ 韓国語の自然言語処理をする形態素解析器は分ち書きの間違いや誤字、脱字があると分析結果が異なってくるため(조숙연・박영민, 2018)、本稿ではこれらの誤用については修正し分析した。

⁷ 分ち書きの判定は許容ではなく原則に従って分析した。たとえば、「ハングル正書法」の原則によると、補助用言と本用言は空けて書くため、それぞれを語彙として捉えた。また、여름`방학のように『標準国語大辞典』の見出し語に載っている合成語の場合も、名詞と名詞の間を空けて書くのが原則である場合は여름`방학을それぞれ語彙として分析した。

⁸ Read(2000)、Laufer & Nation(1995)は名詞、動詞、形容詞、副詞を内容語としているが、韓国語を対象とした研究ではその範囲に違いが見られる。강범모・김홍균(2009)、남주연(2015)では一般名詞、動詞、形容詞、一般副詞だけでなく、依存名詞、固有名詞、代名詞、数詞、冠形詞、接続副詞、感嘆詞、指定詞、補助用言までを内容語と捉えているが、本研究では、배도용(2012)、안의정(2017)、강정희(2020)と同様に一般名詞、動詞、形容詞、一般副詞を内容語と捉えた。

語彙情報を可視化する Word Cloud を用いる。Word Cloud は使用頻度が高い語彙であれば文字の大きさが大きくなり、使用頻度が低ければ文字の大きさが小さくなるため、どのような語彙がよく使われているかを視覚的にとらえやすく、一目で高頻度の語彙を把握することができる。

3. 結果と考察

3.1 内容語別のTokenとType

3.1.1 一般名詞のTokenとType

表 1 は、各群別に一般名詞の延べ語数(Token)と異なり語数(Type)の総数と平均値を示したものである。Token の平均値を見ると、上位群>中位群>下位群の順に高いが、Type の平均値は下位群>上位群>中位群の順に高いことが分かる。上位群は全体の平均値より Token と Type が高く、下位群より平均的に一般名詞を 2.37 個多く使用して作文をしているが⁹、中位群は全体の平均値より Token と Type が低い。下位群の Token は全体の平均値より低いが、Type は全体の平均値よりは高く、上位群よりも高いことが分かる。

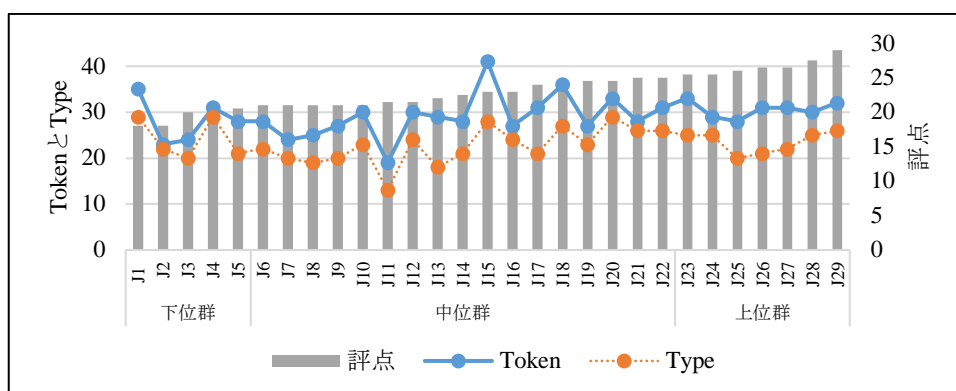
<表 1> 各群別一般名詞の Token と Type の総数および平均値

	下位群	中位群	上位群	合計
Token	141(28.2)	494(29.06)	214(30.57)	849(29.26)
Type	121(24.2)	384(22.59)	164(23.43)	666(23.07)

数値は総数、カッコ内は平均値

図 1 は一般名詞の Token と Type を示したものであるが、すべての群において Token が増えるにつれて Type も増えており、全体的に Token と Type が比例していることが分かる。

⁹ 個別に見ると(図 1)、上位群より下位群と中位群の Token が多い場合もある。



＜図1＞ 学習者別一般名詞のTokenとType¹⁰

Token と Type は、その差が大きければ同じ語彙を繰り返して使っていることを、その差が少なければ同一の語彙を使わずに多様な語彙を使っていることを意味する。例えば、Token が同じ 33 である下位群の J4 と中位群の J17 の Type はそれぞれ 29、21 であるが、これは J4 が J17 に比べて異なる語彙をより多く使っており、J17 は J4 に比べて同一の語彙を多く繰り返していることを示す。しかし、J17 に比べて多様な語彙を使っている J4 の作文評価は低い結果となっている。また、Token と Type が比較的多い下位群の J1(それぞれ 35、29)は、Token と Type が最も低い中位群の J11(それぞれ 19、13)より作文評点が低い。中位群の J15 は全グループの中で Token が最も多く、Type も多い方であるが(それぞれ 41、28)、作文評価では中レベルの評価を受けている。

また、下位群は、図 1 に見るように学習者間で差が大きく、作文評点と Token および Type との相関関係においても有意な差は認められなかった¹¹。特に、下位群の J1 と J4 の Type は他の学習者より多いが、作文評価は低い。これは下位群の学習者は語彙使用において意味や用法を間違っているケースが多いため¹²、それが作文評価に繋がったと考えられる¹³。中位群は作文評点と Type との相関関係に

¹⁰ J1 から J29 の順番は評点順である。

¹¹ 作文評点と Token および Type との間の相関係数を求めた結果、有意水準 5% で下位群はそれぞれ $r=-0.074$ 、 $r=-0.191$ 、中位群はそれぞれ $r=0.419$ 、 $r=0.620^{**}$ 、上位群はそれぞれ $r=0.266$ 、 $r=0.370$ であった。

¹² 例えば、「鶏(とり)」を「鷄」ではなく、翻訳アプリを使った検索結果「𪗇」をそのまま引用するなどの間違いが見られる。このことから、辞書使用においては検索結果や辞書の意味だけでなく、類義語や対義語の情報にも注意を向けるように指導する必要性が示された。

¹³ 本稿で研究対象としている作文は学習者の辞書使用を許可しており、用言とは違って活用し

において有意な差が認められており、異なる語彙を多く使うと作文評価が高くなる傾向にある。一方、上位群においては Token と Type が作文評価に比例して増加しているように見えるが(図 1)、相関関係において有意な差は見られなかった。この要因として、上位群の場合、語彙使用においては学習者間で大きなレベルの差は見られず、一般名詞の語彙使用が作文評価に直接的な影響を及ぼしていないからだと考えられる。

以上のことから一般名詞を多く使用して作文をすることは、下位群と上位群の作文評価には影響を及ぼさないことが分かった。下位群の場合は、語彙の誤用による減点はその原因として考えられるため、下位群の学習者には初級レベルの基礎語彙を復習させ、マスターさせる必要性が認識された。また、中位群では、一般名詞と Type の間に正の相関関係が認められたことから、同一の語彙を避けて様々な語彙を使用することが作文評価に影響を及ぼすと言える。したがって、中位群においては初級レベルに合う適切な語彙の意味や用法の指導だけでなく、類義語や対義語などの多様な語彙を使用させるための語彙指導の必要性が示唆された。

3.1.2 動詞のTokenとType

表 2 は、各群別に動詞の延べ語数(Token)と異なり語数(Type)の総数と平均値を示したものである。Token と Type の平均値を見ると、下位群>中位群>上位群の順に高くなっている。下位群はグループ間で Token と Type が最も多く、上位群より動詞を平均的に 3.06 個多く使用しており、異なる語彙も上位群より 1.26 個多く使用し作文を書いていることが分かる。しかし、これは下位群の学習者が動詞に関する語彙力が高いからではなく、下位群の学習者が辞書を多く利用したことにより生じたものと考えられる。実際に、学習者が使用している語彙を見ると、下位群の学習者は既習語彙をまだ上手に使いこなせておらず、辞書に頼り、中級以上の語彙を使用し日本語をそのまま訳した文章が多く見られた(3.2.2 参照)。

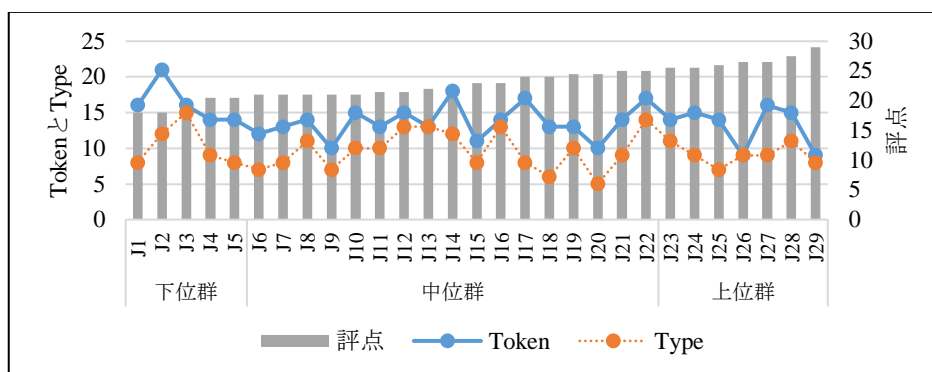
ない一般名詞は、辞書の用法などを確認すれば、正しく使えることが想定できる。しかし、下位群では意味や用法を間違っている学習者が少なくなかった。これは辞書の意味を理解しただけでは正しい文章を作れないことを裏付けることであり、今後、作文指導において辞書やアプリ利用時の問題点をどのように解決するかは課題として残っている。

<表2> 各群別動詞の Token と Type の総数および平均値

	下位群	中位群	上位群	合計
Token	81(16.2)	232(13.65)	92(13.14)	405(13.97)
Type	52(10.4)	164(9.65)	64(9.14)	280(9.66)

数値は総数、カッコ内は平均値

図2は動詞の Token と Type を示したものであるが、下位群と上位群ともに Token が増えるにつれて Type も増えており、全体的に Token と Type が比例していることが分かる。ところが、全グループを通して学習者間に差が大きく、動詞の Token が最も多いのは下位群の J2(21)で、最も少ないのは上位群の J26(9)と J29(9)である。そして、動詞の Type が最も多いのは下位群の J3(15)で、最も少ないのは中位群の J20(5)である。各群の作文評価と Token および Type との相関関係においても有意な差は認められなかった¹⁴。



<図2> 学習者別動詞の Token と Type

また、授業時の様子からすると、下位群では辞書を頻繁に参照する傾向にあり、中位群や上位群より動詞を多く使用しているものの、その用法や活用を間違っ使ったことが低評価に繋がったと考えられる。

このように下位群の延べ語数と異なり語数が上位群より多くても低評価を受けることから、下位群には一般名詞での解決法と同様、初級レベルの既習語彙の用

¹⁴ 作文評点と Token および Type との間の相関係数を求めた結果、有意水準5%で下位群はそれぞれ $r=-0.191$ 、 $r=-0.769$ 、中位群はそれぞれ $r=0.168$ 、 $r=-0.059$ 、上位群はそれぞれ $r=-0.534$ 、 $r=-0.150$ であった。

法や活用をしっかりと身につけさせ、文中で適切に使用できるように指導させる必要性が示唆された。

3.1.3 形容詞のTokenとType

表3は、各群別に形容詞の延べ語数(Token)と異なり語数(Type)の総数と平均値を示したものである。TokenとTypeの平均値を見ると、下位群>中位群>上位群の順に高くなっている。

<表3> 各群別形容詞のTokenとTypeの総数および平均値

	下位群	中位群	上位群	合計
Token	20(4)	57(3.35)	21(3)	98(3.38)
Type	17(3.4)	47(2.76)	19(2.71)	82(2.86)

数値は総数、カッコ内は平均値

形容詞は全体的にその使用頻度が低く、図3に見るように、TokenとTypeが変わらない場合が多い。そして、TokenとTypeともに学習者間の差が大きく、形容詞を使っていない上位群の学習者(J23)もいる。一般名詞と動詞に比べて、形容詞のTokenとTypeはかなり少ないが、これは初級学習者の自己紹介文という特性上、形容詞があまり現れなかったと考えられる¹⁵。また、作文の評点とTokenおよび

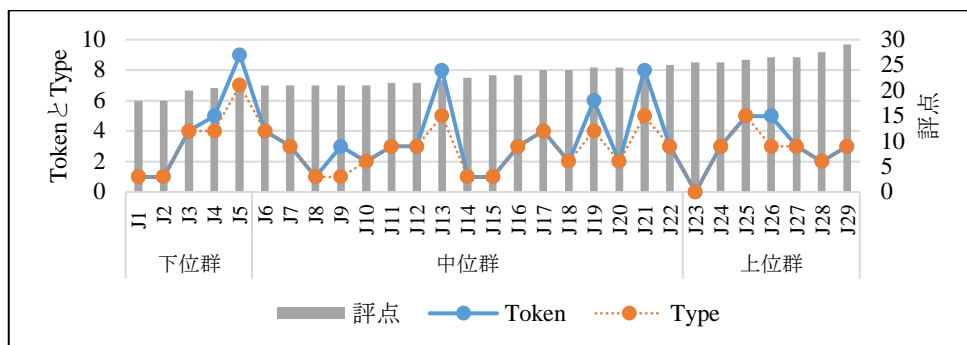
¹⁵ 韓国語学習用の語彙選定のために行われた150万語節のコーパスに現れた内容語の割合は、一般名詞(44.76%)>動詞(21.68%)>形容詞(7.09%)>副詞(5.71%)で、内容語が全体の79.24%を占めている(조남호, 2002)。これは学習者が算出した内容語の割合とも大きく違わず、배도용(2012)では、上級レベルの日本人学習者2名の作文で算出した内容語の割合が一般名詞(23.70%)>動詞(5.59%)>形容詞(4.83%)>一般副詞(2.02%)である。조숙연・박영민(2018)においても英語圏の上級レベルと下位レベルの学習者が算出した内容語の割合は、一般名詞>動詞>形容詞>副詞の順である。一方、本稿では形容詞より副詞の割合が高いが、これは自己紹介文に形容詞があまり使われないからだけでなく、初級学習者の場合、動詞や形容詞のように活用させなくても単独で使える副詞を好んで多用したからだと考えられる。

<表4> 各群別内容語のTokenの割合

	下位群	中位群	上位群	合計
一般名詞	141(28.83%)	494(30.74%)	214(31.99%)	849
動詞	81(16.56%)	232(14.44%)	92(13.75%)	405
形容詞	20(4.09%)	57(3.55%)	21(3.14%)	98
副詞	27(5.52%)	74(4.61%)	36(5.38%)	137
総単語数	489	1607	669	2765

数値は総数、カッコ内は割合

Type との間の相関分析において、下位群は作文の評点と Type 間に強い正の相関関係が認められたことから¹⁶、下位群は多様な形容詞を使うことが作文評価につながるということが分かった¹⁷。



<図3> 学習者別形容詞のTokenとType

3.1.4 一般副詞のTokenとType

表5は、各群別に一般副詞の延べ語数(Token)と異なり語数(Type)の総数と平均値を示したものである。Tokenの平均値を見ると、下位群>上位群>中位群の順に高いが、Typeの平均値は、上位群>下位群>中位群の順に高くなっている。

<表5> 各群別一般副詞のTokenとTypeの総数および平均値

	下位群	中位群	上位群	合計
Token	27(5.4)	74(4.35)	36(5.14)	137(4.72)
Type	21(4.2)	67(3.94)	31(4.43)	119(4.10)

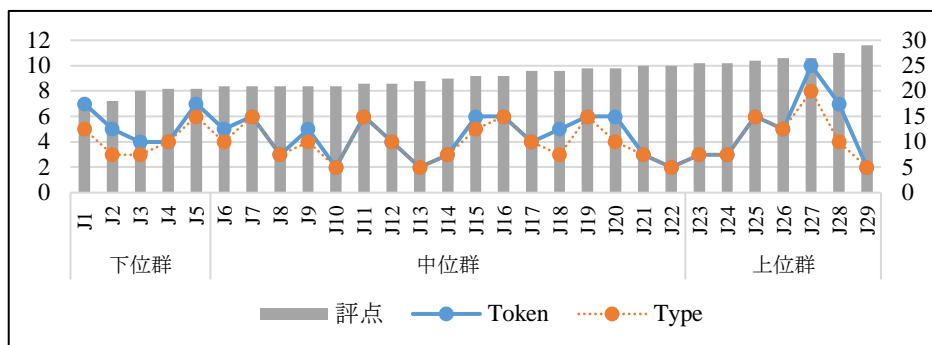
数値は総数、カッコ内は平均値

一般副詞においても、形容詞と同様に全体的な使用頻度は低く、図4に見るように、TokenとTypeが変わらない場合が多い。また、学習者間の差も大きく、作

¹⁶ 作文の評点とTokenおよびTypeとの間の相関係数を求めた結果、有意水準5%で下位群はそれぞれ $r=0.878$ 、 $r=0.900^*$ 、中位群はそれぞれ $r=0.280$ 、 $r=0.290$ 、上位群はそれぞれ $r=0.077$ 、 $r=0.115$ であった。

¹⁷ ただ、これを一般化するには形容詞のTypeが少ないため、今後調査対象を増やして検証する必要があると考えられる。

文の評点と Token および Type との間の相関分析の結果においても有意な差は見られなかった。これらから、一般副詞の Token と Type も作文評価には影響を及ぼさないことが分かった¹⁸。



<図4> 学習者別一般副詞の Token と Type

3.2. 内容語別の使用語彙

3.2.1 一般名詞¹⁹における使用語彙

日本人初級学習者の全作文に 8 回以上出現した一般名詞は、「한국(74)、한국어(48)²⁰、공부(27)、대학교(25)、여행(22)、일본(22)、사람(21)、취미(19)、학년(19)、학과(14)、때(13)、친구(13)、드라마(12)、요리(11)、음식(10)、음악(9)、동아리(8)」である。허원진・이민우(2019)は、「한국、한국어」は初級から上級学習者に至るまで最も多い高頻度語に属しているとしているが、本稿においても同様の結果が得られた²¹。

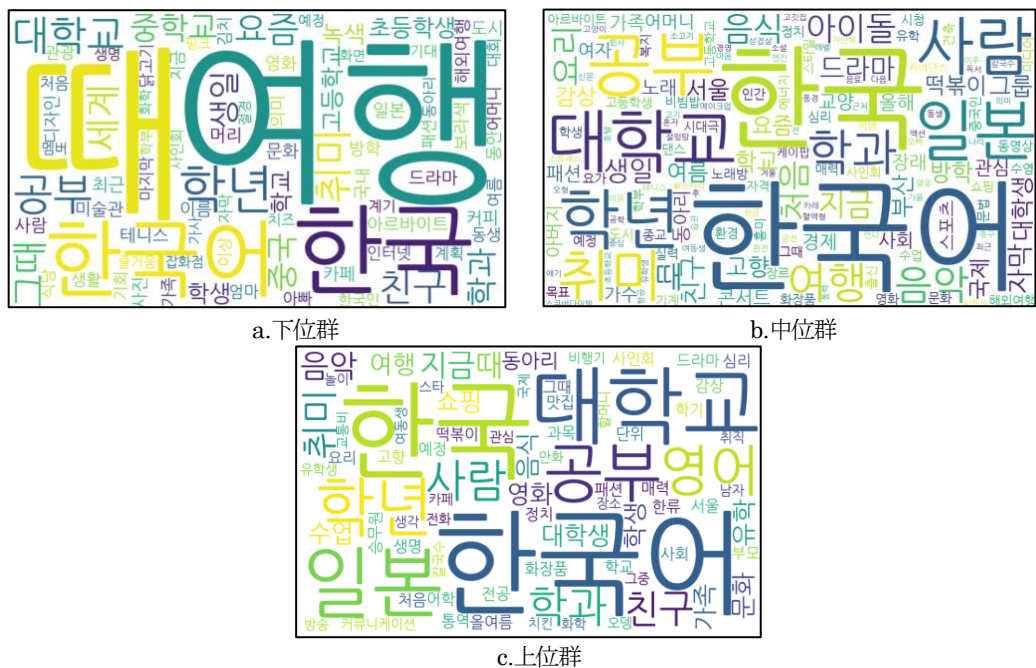
¹⁸ 作文の評点と Token および Type との間の相関係数を求めた結果、有意水準 5% で下位群はそれぞれ $r=-0.293$ 、 $r=0.237$ 、中位群はそれぞれ $r=0.011$ 、 $r=-0.079$ 、上位群はそれぞれ $r=0.102$ 、 $r=-0.285$ であった。

¹⁹ 本稿では、「○○대학교」のような機関名は一般名詞として捉えた。これは機関名に固有名詞が含まれているが、学習者は全体を 1 つの単位として捉え、その意味を知った上で駆使するからである(강정희, 2020)。また、『標準国語大辞典』に見出し語として載っている固有名詞は、TOPIK の語彙リストにも載っていることから、一般名詞として捉えた。一方、見出し語に載っていないものは固有名詞として捉えた。たとえば、『標準国語大辞典』の見出し語である「떡볶이, 서울」は一般名詞として、『標準国語大辞典』に載っていない「닭한마리」は固有名詞として捉えた。

²⁰ 「韓国語」は「한국어(45)」と「한국말(3)」の両方が見られたが、本稿では「한국말」も「한국어」としてカウントした。なお、「한국말」はすべて中位群で見られた。

²¹ 下位群の 1 名のみを除いた全学習者が「한국」または「한국어」を使用している。

ところが、これらは学習者が重複して使用した語彙をすべて含む延べ語数(Token)であるため、同一学習者が何度も使用している場合も含まれており、下位群(5名)、中位群(17名)、上位群(7名)の学習者がそれぞれどのような一般名詞をどのような頻度で使用しているかは把握できない。そこで、以下では、同一学習者の重複使用を除いた異なり語数(Type)を中心に、各群の作文に見られる一般名詞の使用頻度および使用様相の傾向を把握する。その結果を踏まえて、各群における語彙指導の方向性を探る。



<図5> 一般名詞のWord Cloud

図 5a～図 5c は、日本人初級学習者の作文に見られる一般名詞を Word Cloud で示したものである。Word Cloud では使用頻度が高い文字が他よりも大きくなるが、各群では一般名詞における高頻度語彙の様相が各々異なっていることが分かる。全グループを通して共通して大きい文字は「한국어、한국、대학교、학년、공부、취미、학과」であるが、他の群と違って下位群において「때、여행」の文字が大きいのも目立った特徴である²²。

²² 강범모・김홍균(2009)によると、韓国語のコーパスにおいて一般名詞の使用頻度は「말、사람、

表 6 は各群における使用語彙の例を示したものであるが、全グループを通して共通して使用頻度が高いのは「한국어、한국」である。各群において 50%以上の学習者が使用している一般名詞を中心に見ると、下位群は「때、여행、한국、한국어、학년」の順に、中位群は「한국어、한국、공부、대학교、일본、학년、사람、취미」の順に、上位群は「한국어、한국、대학교、일본、학년、공부、영어、사람」の順に使用頻度が高い。

また、中位群と上位群の学習者は語彙以外では既習内容を積極的に活用していたが²³、下位群では他のグループに比べて共通語彙が少なく、「기회、기대、계기、즐거움、절경、화면」などのように初級レベルではあまり使われない語彙を使っており、日本語の文章をそのまま韓国語に訳したような文章も多く見られた。中位群では大部分の学習者が「대학교、공부、일본、사람、취미、학년、학과」を使用しており、「떡볶이、삼겹살、칼국수、설렁탕」など韓国料理に関する話題を書いた学習者が多く、韓国の食文化への関心が高いことも窺えた。上位群は、大部分の学習者が勉強関連の話題について取り上げており、他の群では現れない「영어(4)」の使用頻度も高く、「맛집、한류」などの新造語も使用している。

때、일、생각」の順に高い。また、조숙연・박영민(2018)では、韓国語を専攻する英語圏の学習者(3年生)の作文における内容語を考察しているが、上位レベルの学習者において最も高い頻度の一般名詞は「때」であり、下位レベルの学習者においても「때」は2番目に頻度が高い。本稿では、下位群の「때」の使用頻度が高いが、下位群の学習者は1名を除いて全員が韓国に興味を持つようになったきっかけを書いており、「中学校の時、高校の時」のような表現をよく使用している。

²³ 中位群と上位群では「저는 ○○(이)라고 합니다. 일본 사람입니다. 대학생입니다. ○학년입니다. 취미는 ○○입니다. ○○을/를 좋아합니다。」などの既習内容を活用して作文をしているのに対して、下位群では「○○를/을 중심으로 공부하고 있습니다.」「더 공부해야 된다고 생각하고 있습니다.」などのように、既習内容をあまり活用せずに作文をしている。中位群と上位群の学習者の大部分が使用している「일본 사람입니다.」も下位群では1名しか使っていないことから、下位群の学習者は既習内容をあまり熟知しておらず、作文にも活用できていないと考えられる。

<表 6> 各群における一般名詞の例(カッコ内は頻度)

	TOPIK 初級語彙	TOPIK 中級以上の語彙 ²⁴
下位群	<p>때(4), 여행(4), 한국(3), 한국어(3), 학년(3), 공부(2), 대학교(2), 취미(2), 친구(2), 세계(2), 그때(2), 요즘(2), 학교(1), 학생(1), 초등학교(1), 중학교(1), 고등학교(1), 아르바이트(1), 테니스(1), 드라마(1), 디자인(1), 방학(1), 의미(1), 사진(1), 미술관(1), 영화(1), 커피(1), 카페(1), 해외여행(1), 최근(1), 문화(1), 도시(1), 이름(1), 일본(1), 사람(1), 머리(1), 녹색(1), 보라색(1), 국내(1), 만(1), 안(1), 중학교(1), 인터넷(1), 생일(1), 가족(1), 아빠(1), 엄마(1), 어머니(1), 동생(1), 중국(1), 계획(1), 마지막(1), 생활(1), 지금(1), 관광(1), 집(1), 처음(1), 식당(1), 김치(1), 닭고기(1), 동안(1), 대회(1), 이상(1), 앞(1), 중국(1), 여름(1), 기회(1)</p>	<p>학과(2), 자막(1), 패션(1), 한국인(1), 예(1), 기대(1), 치즈(1), 계기(1), 사인회(1), 동아리(1), 가사(1), 예정(1), 생명(1), 잡화점(1), 즐거움(1), 핑크(1), 멤버(1), 절경(1), 화면(1), 화학(1), 학부(1)</p>
中位群	<p>한국어(16), 한국(14), 공부(13), 대학교(13), 일본(12), 학년(12), 사람(11), 취미(11), 여행(7), 요리(6), 음식(6), 처음(6), 때(5), 음악(5), 지금(5), 친구(4), 드라마(4), 생일(4), 학교(3), 대학생(3), 방학(3), 고향(3), 떡볶이(3), 요즘(3), 서울(3), 부산(3), 국제(3), 콘서트(2), 여름(3), 노래(2), 가족(2), 아버지(2), 어머니(2), 여자(2), 가수(2), 관심(2), 몸(2), 스포츠(2), 올해(2), 고등학생(2), 동생(1), 여동생(1), 남동생(1), 언니(1), 오빠(1), 아르바이트(1), 학생(1), 유학(1), 해외여행(1), 사인회(1), 댄스(1), 도시(1), 초등학교(1), 고등학교(1), 노래방(1), 밥(1), 비빔밥(1), 삼겹살(1), 칼국수(1), 설렁탕(1), 고기(1), 소고기(1), 카레(1), 화장품(1), 수영(1), 문화(1), 쇼핑(1), 영화(1), 그때(1), 수업(1), 의미(1), 지난해(1), 혼자(1), 전(1), 후(1), 호텔(1), 꿈(1), 중심(1), 유료(1), 최근(1), 유학생(1), 얼굴(1), 습관(1), 스트레스(1), 한글(1), 얘기(1), 신문(1), 나라(1), 경영(1), 축구(1), 근처(1), 음악(1), 이유(1), 항공(1), 회사(1), 힘(1), 테니스(1), 시대극(1), 봄(1), 가을(1), 겨울(1), 고양이(1), 다음(1), 이후(1), 풍경(1), 마음(1), 독서(1), 책(1), 소설(1), 일(1)</p>	<p>학과(9), 아이돌(6), 자막(4), 감상(3), 그룹(3), 학부(3), 케이팝(3), 패션(2), 장래(2), 동아리(2), 사회(2), 경제(2), 교양(2), 정치(1), 심리(1), 건축(1), 기계(1), 미디어(1), 인간(1), 환경(1), 복지(1), 팬(1), 동영상(1), 시청(1), 예정(1), 종교(1), 스타일(1), 매력(1), 목표(1), 흥미(1), 중국인(1), 자격(1), 에너지(1), 요가(1), 출신(1), 장르(1), 곡(1), 문법(1), 실력(1), 커버댄스(1), 떡볶이(1), 스쿠버다이빙(1), 메이크업(1), 혈액형(1), 오형(1), 황소자리(1), 관전(1), 레벨(1), 구기(1), 액션(1), 궁전(1), 동력(1), 공학(1), 엔진(1), 고깃집(1)</p>
上位群	<p>한국어(7), 한국(6), 대학교(6), 일본(5), 학년(4), 공부(4), 영어(4), 사람(4), 취미(3), 친구(3), 음악(3), 때(3), 지금(3), 대학생(2), 여행(2), 쇼핑(2), 영화(2), 유학(2), 문화(2), 음식(2), 가족(2), 학생(2), 수업(2), 앞(2), 학기(1), 전공(1), 처음(1), 고향(1), 학교(1), 남자(1), 할머니(1), 여동생(1), 서울(1), 떡볶이(1), 치킨(1), 칼국수(1), 카페(1), 화장품(1), 그때(1), 드라마(1), 요리(1), 전화(1), 만화(1), 말(1), 스타(1), 교통비(1), 비행기(1), 책(1), 유학생(1), 생각(1), 취직(1), 방송(1), 그중(1), 놀이(1), 옷(1), 장소(1), 국제(1), 배(1), 관심(1)</p>	<p>학과(4), 동아리(2), 감상(1), 패션(1), 통역(1), 과목(1), 단위(1), 매력(1), 예정(1), 사인회(1), 사회(1), 정치(1), 심리(1), 생명(1), 울어름(1), 부모(1), 승무원(1), 한류(1), 맛집(1), 어학(1), 커뮤니티케이션(1), 화학(1), 오텍(1)</p>

²⁴ 国際国立国語院の韓国語能力試験(TOPIK)のHP上で公開している初級語彙(1,847個)以外のものを中級以上の語彙とした。ここにはTOPIKの中級語彙だけでなく、TOPIKの語彙リストには載っていない語彙(網掛けで表示)も含まれている。

全体的には大学生活(대학교、학년、학과、대학생、방학、동아리)、勉強(한국어、공부、영어、어학)、趣味(취미、여행、음악、요리、음식、아이돌、케이팝²⁵、드라마)関連の語彙が多く見られた。また、全学習者が中級以上の語彙を使用しており、初級レベルの既習語彙だけで自己紹介文を書いている者はいなかった。

自己紹介というのはごく個人的なテーマであり、学習者自身に関わる個人的な趣味や関心、大学生活などに関する語彙は個々に異なるため、「정치、경제、환경、기계、국제、심리、사회」などの専攻に関する語彙や「관광、어학、승무원、노래방、비빔밥、맛집、유학、화장품」などの関心や興味に関する語彙においては使用頻度が1のものが多数あるのも特徴的である。

以上のことから、中位群と上位群では自己紹介に関する典型的な表現を使っており、共通した語彙も多く見られたが、個人的な事柄については各群において使用語彙の様相が異なっていることが分かった。そして、下位群の使用語彙の様相から、下位群は既習内容が十分に身につけていない学習者がおり、既習内容を定着させる指導を徹底的に行う必要性が示唆された。

3.2.2 動詞における使用語彙

日本人初級学習者の全作文に4回以上出現した動詞は、「가다(69)、좋아하다(58)、하다(35)、하다²⁶(22)、먹다(19)、공부하다(19)、되다(16)、시작하다(12)、보다(11)、듣다(10)、배우다(7)、살다(7)、읽다(5)、알다(5)、말하다(4)、만나다(4)」である²⁷。ところが、これらは学習者が重複して使用した延べ語数であるため、以下では、同一学習者の重複使用を除いた異なり語数を中心に考察する。

図 6a~図 6c は日本人初級学習者の作文に見られる動詞を Word Cloud で示したものである。全グループにおいて文字が共通して大きく表示されているのは「가다、좋아하다」である。

²⁵ 本稿ではアルファベットで表記したものは分析対象から外した。「케이팝」に「K-POP」と表記したものも含むと、「케이팝」の頻度は、下位群は1、中位群は5、上位群は1になる。

²⁶ 本稿では、「공부를 하다」のように目的語を取る場合は「하다」として、「저는 ○○(이)라고 합니다」のように引用を現す場合は「하다2」として分類した。

²⁷ 허원진・이민우(2019)では、テキストのテーマによって学習者が算出する語彙が異なり、学習者の熟達度によっても差が見られるものの、初級学習者は「좋아하다、하다、가다、먹다」などをよく使っているとしているが、本稿においても同様の結果が得られた。



< 図 6 > 動詞の Word Cloud

他に下位群では「하다」が、中位群では「하다2、시작하다、공부하다、하다」が、上位群では「하다2、되다、시작하다、살다」の文字が大きく表示されていることが分かる。

表7は各群における使用語彙の例を示したものであるが、Word Cloud で見たように全グループにおいて共通して使用頻度が高いのは、「가다、좋아하다」で、大部分の学習者が使用していることが分かる。各群において50%以上の学習者が使用している一般名詞を中心に見ると、下位群は「가다、좋아하다、하다、공부하다」の順に、中位群は「좋아하다、가다、하다2、시작하다」の順に、上位群は「가다、좋아하다、하다2、하다、되다」の順に使用頻度が高い。

<表 7> 各群における動詞の例(カッコ内は頻度)

	TOPIK 初級語彙	TOPIK 中級以上の語彙
下位群	가다(5), 좋아하다(4), 하다(4), 공부하다(3), 되다(2), 말하다(2), 배우다(2), 하다 2(2), 알다(1), 가져오다(1), 모으다(1), 언다(1), 끝나다(1), 여행하다(1), 듣다(1), 계속하다(1), 부탁하다(1), 모르다(1), 쓰다(1), 찍다(1), 생각하다(1), 시작하다(1), 만나다(1), 먹다(1), 출장하다(1), 빠지다(1), 부탁하다(1)	위하다(1), 참석하다(1), 우승하다(1), 연속하다(1), 검색하다(1), 조사하다(1), 포기하다(1), 도전하다(1), (예) 들다(1)
中位群	좋아하다(17), 가다(15), 하다 2(15), 시작하다(9), 공부하다(8), 하다(8), 먹다(6), 보다(7), 듣다(5), 되다(6), 배우다(4), 잘하다(4), 살다(3), 읽다(2), 알다(3), 유학하다(3), 만들다(2), 일하다(2), 쓰다(2), 자라다(2), 생각하다(2), 가지다(2), 이야기하다(2), 태어나다(2), 뵙다(2), 만나다(1), 졸업하다(1), 올리다(1), 남다(1), 움직이다(1), 다녀오다(1), 나누다(1), 다니다(1), 부탁하다(1), 놀다(1), 사랑하다(1), 쇼핑하다(1), 이해하다(1), 못하다(1), 조심하다(1)	위하다(1), 가입하다(1), 작성하다(1), 풀리다(1), 살찌다(1), 소속되다(1), 관하다(1), 복돋우다(1), 취득하다(1)
上位群	가다(5), 좋아하다(5), 하다 2(5), 하다(4), 되다(4), 살다(2), 시작하다(2), 오다(2), 읽다(1), 아르바이트하다(1), 울다(1), 다니다(1), 찾다(1), 놀다(1), 사랑하다(1), 배우다(1), 보다(1), 이해하다(1), 가지다(1), 말하다(1), 못하다(1), 노력하다(1), 전하다(1), 가지다(1), 만나다(1), 전공하다(1), 계시다(1), 태어나다(1), 소속하다(1)	위하다(1), 대하다(1), 이루다(1), 구입하다(1), 취득하다(1), 이수하다(1)

本稿で研究対象としている作文は自己紹介文であるため、好きなことについて書いたり、「韓国に行ったことがある、韓国に行きたい」といった内容が多く、「좋아하다, 가다」が頻繁に使用されている。それに続いて使用頻度が高いのは「하다」である²⁸。

下位群と中位群では、一般名詞「공부」以外にも、動詞「공부하다」も多く使用していたが、上位群の作文に「공부하다」は現れなかった。下位群と上位群に比べて、中位群では「먹다, 보다, 듣다」のように韓国料理、ドラマ、K-POPなどの趣味関連の語彙も多く使用されており、韓国の文化への高い関心が窺える。

²⁸ 강범모・김흥규(2009)によると、韓国語のコーパスにおいて動詞は「하다, 있다, 되다, 보다, 대하다, 위하다, 가다, 받다, 알다, 오다」の順に使用頻度が高い。本稿では、目的語を取る「하다」と引用の「하다」を区別して分類したが、両方を合わせると、「하다」が最も使用頻度の高い動詞になる。中国人学習者の発話と作文における縦断的語彙使用を考察した 이수미(2017)においても、最も使用頻度が高い語彙は「하다」であり、一般名詞よりも頻繁に使われていることが報告されている。

そして、各群において共通して使用されている中級以上の語彙は「위하다」である²⁹。

一般名詞では、全学習者が中級以上の語彙を使用していたが、動詞では、中級以上の語彙を使っていない学習者は下位群で1名、中位群で10名、上位群で3名であり、初級レベルの動詞だけで自己紹介文を書いている学習者も少なくなかった。下位群の学習者は1名を除いて中級以上の多様な動詞を使って作文をしているが、その用法や活用を間違っ使用学習者が多かつたため、特に下位群においては既習内容の意味や用法を身につけさせ、まずは既習内容を活用した作文を書かせる必要があると考えられる³⁰。

3.2.3 形容詞における使用語彙

日本人初級学習者の全作文に3回以上出現した形容詞は、「있다(25)、안녕하다(14)、없다(13)、좋다(8)、재미있다(6)、맛있다(5)、많다(5)、맵다(4)、즐겁다(3)」である³¹。ところが、これらは学習者が重複して使用した延べ語数であるため、以下では、同一学習者の重複使用を除いた異なり語数を中心に考察する。

図7a～図7cは日本人初級学習者の作文に見られる形容詞をWord Cloudで示したものであるが、全体的に共通して大きく表示されている文字は「안녕하다、있다、없다」である。

²⁹ 「위하다、대하다」は説明と主張のために利用される客観的な述語である。このような語彙は3級(中級)から頻繁に現れる語彙であり(허원진・이민우, 2019)、終止形よりは「-을/를 위해서(～のために)」「-에 대해서(～について)」の文型でよく使われている。

³⁰ 「하다」のように比較的活用が簡単なものを中心に語彙を増やさせることも学習者の負担を減らし、生産的な効果が得られる方法であると言える。

³¹ 강범모・김홍균(2009)によると、韓国語のコーパスにおいて形容詞は「없다, 같다, 그렇다, 크다, 많다, 좋다, 어떻다, 이렇다, 새롭다, 어렵다」の順に使用頻度が高いが、形容詞「있다」は179番目となっており、使用頻度が低い。



<图7> 形容詞のWord Cloud

各群における使用語彙の例を示した表 8 と合わせてみると、形容詞は一般名詞や動詞に比べて使用頻度が低く、各群ごとに使用頻度の様相も異なっている。下位群では「없다, 있다, 안녕하다, 많다, 재미있다」の順に、中位群では「있다, 안녕하다, 없다, 좋다, 맛있다」の順に、上位群では「안녕하다, 있다, 많다, 즐겁다」の順に使用頻度が高い。

<表 8> 各群における形容詞の例(カッコ内は頻度)

	TOPIK 初級語彙	TOPIK 中級以上の語彙
下位群	없다(4), 있다(2), 안녕하다(2), 많다(2), 재미있다(2), 맛있다(1), 어떨다(1), 기쁘다(1), 화려하다(1),	아쉽다(1)
中位群	있다(10), 안녕하다(8), 없다(6), 좋다(5), 맛있다(3), 맵다(2), 재미있다(2), 귀엽다(1), 친하다(1), 친절하다(1), 간단하다(1), 건강하다(1), 즐겁다(1), 멋있다(1), 예쁘다(1), 어렵다(1)	
上位群	안녕하다(4), 있다(3), 많다(2), 즐겁다(2), 같다(1), 아니다(1), 싸다(1), 맵다(1), 맛있다(1), 재미있다(1), 어렵다(1)	유일하다(1)

「안녕하다」が多数現れたのは、自己紹介の冒頭に「안녕하세요³²」という挨拶から始まる学習者が多かったからである。他には「없다, 있다³³, 좋다, 많다」の使用頻度も比較的高い³⁴。

ところで、韓国語の学習について「어렵다」というネガティブな形容詞を使用している学習者は、中位群1名と上位群1名のみである。上位群の学習者は「어렵지만 재미있습니다」と書いていることから、全体として韓国語の学習に対して負のイメージが少ないことも窺える。ただ、自己紹介文における形容詞の使用頻度がそれほど高くないため、これを一般化するには研究対象のデータを増やし、検証する必要があると考えられる。

形容詞の使用頻度は、一般名詞や動詞に比べて全体的に低く、中級以上の語彙使用もほとんど使用されていないことが分かる。これは前述したように、初級学習者の自己紹介文という特性上、形容詞があまり現れなかったからだと考えられる。このことから、形容詞の使用は特に話題やテーマに影響を受けやすいと言える。

3.2.4 一般副詞における使用語彙

日本人初級学習者の全作文に3回以上出現した一般副詞は、「많이(15)、너무(13)、열심히(12)、특히(9)、잘(8)、더(5)、지금(5)、정말(5)、같이(4)、자주(4)、꼭(3)、좀(3)、아주(3)」であり、「많이」が最も多く使われている³⁵。これは一般副詞「많이」は学習者の熟達度に関係なくよく使われるとしている허원진・이민우(2019)と同様の結果である。ところが、これらは学習者が重複して使用した延べ語数であるため、以下では、同一学習者の重複使用を除いた異なり語数を中心に考察する。

³² 「안녕하세요」はPythonによると固有名詞に分析されるが、『標準国語大辞典』では「안녕하다」を形容詞として分類しているため、本稿でも形容詞として分類した。

³³ 可能表現の「-ㄴ 수 있다」や「관심이 있다, 여동생이 있다」などが使用されている。

³⁴ 허원진・이민우(2019)によると、「있다, 없다, 많다」は学習者の熟達度に関係なくよく使われる一般的な語彙であり、「좋다」は初級でよく現れる高頻度語彙であるとしている。中国人学習者の発話と作文における縦断的語彙使用を考察した이수미(2017)においても、発話では「좋다, 많다, 같다」が、作文では「좋다」の使用頻度が高い結果となっている。

³⁵ 강범모・김홍규(2009)によると、韓国語コーパスにおいて一般副詞は「더, 또, 안, 다시, 잘, 함께, 다, 가장, 없이, 못」の順に使用頻度が高い。

図 8a～図 8c は日本人初級学習者の作文に見られる動詞を Word Cloud で示したものであるが、全体的に共通して大きく表示されている文字はなく、下位群と中位群では「특히、잘」が、中位群と上位群では「열심히、많이」が大きく表示されている。



<図8> 一般副詞のWord Cloud

各群における使用語彙の例を示した表 9 と合わせてみると、形容詞と同様に一般副詞も全体的に使用頻度が低く、各群ごとに使用頻度の様相も異なっていることが分かる。下位群では「너무、특히、잘」の順に、中位群では「열심히、많이、특히、잘」の順に、上位群では「열심히、정말、꼭」の順に使用頻度が高い。

<表 9> 各群における一般副詞の例(カッコ内は頻度)

	TOPIK 初級語彙	TOPIK 中級以上の語彙
下位群	너무(3), 특히(2), 잘(2), 아주(1), 한번(1), 다시(1), 더(1), 완전 히(1), 왜(1), 매일(1), 가장(1), 정말(1), 안(1), 보통(1), 많이(1)	정말로(1), 매번(1)
中位群	열심히(6), 많이(5), 특히(5), 잘(5), 지금(4), 더(4), 너무(3), 없 이(3), 좀(2), 또(2), 주로(2), 아직(2), 자주(2), 같이(2), 제일(1), 언제나(1), 꼭(1), 전혀(1), 다시(1), 모두(1), 가끔(1), 가장(1), 별로(1), 매일(1), 정말(1), 함께(1), 보통(1), 빨리(1), 못(1)	언젠가(3), 원래(1)
上位群	열심히(5), 정말(3), 꼭(3), 많이(2), 너무(2), 같이(2), 특히(2), 자주(2), 매우(1), 이미(1), 모두(1), 더(1), 지금(1), 함께(1), 잘 (1), 아주(1)	일단(1), 마치(1)

ところが、一般名詞、動詞、形容詞では、学習者の全作文において使用頻度の高いものが各群においても使用頻度が高かったのに対し、一般副詞ではその様相が異なる。例えば、全作文において最も多く出現した「많이」は、下位群では1名しか使用しておらず、中位群と下位群においても最も使用頻度が高いものではない。つまり、「많이」は同一学習者が何度も使用しているケースが多いため、延べ語数が多くなり、最も出現したのである³⁶。一方、中位群と上位群では今後の韓国語の学習について一生懸命に(열심히)勉強したいと語っている学習者が多く見られた。

このほか一般副詞については、全学習者が異なる語彙を2回以上使用しているが、学習者間で共通するものが少なく、使用様相は各群ごとに異なっており、各々の群においても共通点はあまり見られなかった。

一般副詞は様々なニュアンスを加えることができるため、適切な一般副詞の使用は作文の内容を豊かにし、作文評価において好印象を与えることができる³⁷。また、副詞は活用なしに単独で簡単に使うことができるため、学習負担も少ない。

³⁶ 허원진・이민우(2019)によると、「좋다, 좋아하다, 한국, 한국어, 많이」は韓国語教育の特性を現す語彙であり、これらは学習者コーパスにおいて初級から上級を通して高頻度語彙に属するものであるが、現代の国語の頻度調査では高頻度語彙ではないとしている。

³⁷ 日本人学習者の母語の語彙使用における特徴がそのまま反映されている可能性がある。これについては後続研究でさらなる考察を進めていきたい。

そこで、作文指導においては当該の語彙に関する意味や用法の解説だけでなく、「너무, 아주, 매우」「같이, 함께」「잘, 자주」「제일, 가장」などのような同義語およびそれに関連する対義語の情報にも学習者の注意を向けさせる必要があると考えられる。

4. まとめと今後の課題

本稿では、日本人初級学習者の自己紹介文に見られる語彙の特徴を考察するために、Token と Type の使用率、内容語の使用頻度の2つの観点から量的分析を行った。

まず、内容語別に延べ語数(Token)と異なり語数(Type)を比較した結果、一般名詞と動詞では全群において Token が増えると Type も増える傾向にあり、全体的に Token と Type が比例していた。一方、全体的に出現頻度が低かった形容詞と一般副詞では、Token と Type が同じ頻度で現れる場合が多数見られたが、学習者間の差が大きいことが分かった。一般名詞の Token は上位群が、動詞、形容詞、一般副詞の Token においては下位群が他の群に比べて平均的に多かったが、作文評価と Token の間に有意な相関関係は見られなかった。そして、一般名詞、動詞、形容詞の Type は下位群が、一般副詞の Type は上位群が他の群に比べて平均的に多かったが、下位群と上位群の Type と作文評価の間に有意な相関関係は認められなかった。動詞、形容詞、一般副詞は、下位群の Token と Type の平均が中位群と上位群より高い傾向にあったが、これは辞書使用が関係していると考えられる。しかし、下位群の学習者は多様な語彙を使って作文をしているものの、結果的には低い評価を受けており、適切な語彙使用が行われていないことが分かった。このことから、下位群には初級レベルの既習語彙の意味や用法を身につけさせ、適切に使用できるように指導させる必要性が示唆された。一方、中位群においては一般名詞の Type と作文評価が正の相関関係にあることから、同一の語彙を避けて多様な一般名詞を使用することが作文評価につながるということが分かった。

次に、内容語別の高頻度語彙の使用様相を考察した結果、一般名詞、動詞においては、全作文において使用頻度の高い語彙は各群においても高い使用頻度の傾

向を見せたが、一般副詞においては各群において各々様相が異なっていた。中位群と上位群は自己紹介に関する典型的な表現を使っており、共通した語彙を多く使用していたが、個人的な事柄については各々様々な語彙を使っていた。一方、下位群は、その使用語彙の様相から既習内容が十分に身につけていない学習者が多いことが分かった。

以上のことから、学習者における既習語彙の習得状況を把握し、学習者には既習語彙を定着させ、意味や用法を適切に使いこなせるように指導する必要性が示唆された。また各群の高頻度語彙における使用様相が他の内容語と異なっている一般副詞の場合、学習者の日本語使用における特徴がそのまま反映されている可能性が示された。

本稿では、日本人初級学習者の自己紹介文における語彙の特徴を量的な観点から考察し、下位群・中位群・上位群における語彙の使用様相を比較分析したという点で意義があると考えられる。なお、韓国語の授業や教科書で提供すべき語彙リストの作成における基礎資料としても活用できるであろう。しかし、本稿の結果を一般化するには研究対象のデータが十分とは言えない。今後は本稿の結果を踏まえ、研究対象のデータを増やし、辞書使用や学習者の日本語の作文能力の影響などを考慮し、日本人初級韓国語学習者の語彙の使用様相についてさらなる検討を進めていきたい。

参考文献

- 강범모·김흥규(2009). 한국어 사용빈도. 서울: 한국문화사.
- 강정희(2020). 한국어 학습자의 어휘 능력 연구. 쓰기 텍스트의 어휘 풍요도를 중심으로. 동국대학교 대학원 박사학위 논문.
- 김미옥(2003). 한국어 학습자의 단계별 언어권별 어휘 오류의 통계적 분석. 한국어 교육, 14(3), 31-52.
- 김민수(2022). 일본인 한국어 학습자의 작문에 나타나는 어휘 풍요도 연구. 학습자중심교과교육연구, 22(2), 263-284.
- 남주연(2015). 한국어 학습자의 구어 복잡성 연구. 통사 및 어휘 복잡성을 중심으로. 경희대학교 대학원 박사학위논문.
- 박정은·김영주(2014). 한국어 고급 학습자의 작문에 나타난 어휘의 다양성. 한국어교육, 25, 1-32.
- 배도용(2012). 한국어 학습자의 쓰기에 나타난 어휘 다양도 및 어휘 밀도 연구. 언어과학, 19, 99-117.
- 조남호(2002). 국어 어휘의 분야별 분호 양상. 관악어문연구, 27, 473-496.
- 조숙연·박영민(2018). Sheffield 대학교 한국어 학습자의 작문 특성 분석. 작문연구, 38, 149-172.
- 조현용(2000). 한국어 어휘교육 연구. 서울: 박이정.

- 안경화(2003). 중간언어 어휘론 연구의 과제와 전망. 이중언어학, 23, 167-186.
- 안의정(2017). 한국어 텍스트의 어휘 다양도와 어휘 밀도 분석. 언어사실과 관점, 41, 349-365.
- 원미진 · 왕역문 · 주우동 · 왕호(2017). 한국어 학습자의 쓰기에 나타난 어휘 풍요도 연구: 숙달도 측정 도구로써 어휘 풍요도 측정 가능성을 중심으로. 어문논총, 71, 33-35.
- 이영지(2011). 중국인 한국어 학습자의 작문에 나타난 수준별 어휘적 특성 연구. 계명대학교 대학원 석사 학위논문.
- 진대연(2006). 한국어 쓰기능력 구성요소로서의 어휘에 대한 연구. 이중언어학, 30, 279-411.
- 한재영 · 박지영 · 현윤호 · 권순희 · 박기영 · 이선웅 · 김현경(2010). 한국어 어휘 교육. 서울: 태학사.
- 허원진 · 이민우(2019). 한국어 학습자의 숙달도별 어휘 사용 양상. 이중언어학, 77, 215-240.
- 杉本直樹(2013). 「WordNetを用いた英語多義語リストの構築」 『立命館言語文化研究』 4, 171-182.
- Engber, C.(1995). The relationship of lexical proficiency to the quality of ESL compositions. Journal of Second Language Writing, 4(2), 139-155.
- Laufer, B.(1994). The lexical profile of second language writing: Does it change over time? RELC Journal, 25(2), 21-33.
- Laufer, B & Nation, P.(1995). Vocabulary Size and Use-Lexical Richness in L2 Written Production. Applied Linguistics, 16, 307-322.
- Miller, J. F.(1991). Quantifying Productive language disorders. In J. F. Miller(Ed.). Research on Child Language Disorders: A Decade of Progress. Austin, TX: Pro-Ed.
- Read, J.(2000). Assessing vocabulary. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Wilkins, D. A.(1972). Linguistics in language teaching, Edward Arnold, London, UK.

(東海大学語学教育センター)

kimminsoo@tokai-u.jp

韓国語教育研究 (第12号)

2022年9月15日 発行

発行者 文 嬉眞

発行所 日本韓国語教育学会

〒577-8052 大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学 国際学部 酒匂康裕 研究室気付

編集者 『韓国語教育研究』編集委員会
文慶喆、李相穆、柳朱燕、金珉秀、
金昌九、權恩熙

印刷所 株式会社 仙台共同印刷
